

草の芽句会だより

NO,115
18,3、1

足伸ばす缶コーヒーに下萌ゆる
雛市の用意整ふ町家かな

文子

ざわめいて春日の動く城の森
警報の収まり春の句会かな

貞子

地藏さまの帽子をとばす春一番
天主閣春一番の雲速し

範子

やま焼きの炎すさまじ美しくしき
足下に芽吹くものあり城歩く

節子

病癒え病癒えよと春を待つ
春めける道の辺に佇ち長話

貞

お天主に芽吹き促す春の雨
山茶花の花びら散らせし夜半の雨

純子

下駄箱の上に紙雛一人住む
食卓に椿一輪一人膳

禮子

師の句碑に雨あたたかき日なりけり
城山を映して濠の水温み

剋子

空の青海の青さよ瀬戸の春
春を行く竹林の風心地よく

芳子

出席者 大黒 川原 吉崎 氏家 真鍋 森 馬場 小山
投句者 小林



今日から三月、城山はもう春の気配である。花を待つこの時期、毎年城山は箒で掃いたように綺麗になる。花壇にはパンジーが色とりどりに風に揺れ、梅林では紅梅が満開である。芽吹きを待つ木々はどれも艶やか。この間までの寒かった日々が嘘のようである。梢に鳴く鳥の声に励まされ櫻林の石段を上ることに。すれ違う観光客の方と挨拶を交わすのも楽しいことである。今月から旧職場の部屋が使えることになりひと安心。大きい机に広いソファ。旧職場というだけで半分我が家のような？気がする。ここならきつといい句ができるはず、そんな予感も。来月はお花見句会。漆林に咲く花の下でお弁当を食べることに。今から楽しみでならない。